浜松医科大学医学部附属病院 医療福祉支援センターニュース　Vol.31　2020.4 TAKE FREE

かけはし
KAKEHASHI

今号裏面は、
『浜松市版「人生会議手帳」について』です

医療福祉支援センター長
小林 利彦

「春」の到来が待ち遠しい！

普通であれば、この３月～４月は長い冬から暖かい季節へと変わりゆき、学校で一緒に学んできた仲間との別れである卒業式や新しい仲間との出会いである入学式・入社式などで心躍る「春」を迎える時期かと思います。ところが、今年は、昨年末から年明け、そして（この「かけはし」の原稿を書いている）今に至るまで、新型コロナウイルス感染症の話題によって、日本だけでなく世界中がどんよりした暗雲のもとでの日常生活を余儀なくされています。ここでは、医療専門職の見解の違いやマスコミの不適切？な報道については言及しませんが、一般市民の生活は、各種イベントの中止や自粛、マスクやトイレットペーパーなど生活必需品の不足・転売、小中高校の休校などを通じて大きく沈滞しています。そのような社会情勢のもと、最近は、経済成長の低下を危惧して各種イベントの自粛緩和なども時に議論されますが、その判断は一般市民には難しいものと考えます。折しも、国の「新型コロナウイルス感染症対策専門家会議」は、2020年3月9日の声明で（１）換気の悪い密閉空間（２）多くの人が密集（３）近距離での会話や発声、という３つの条件が同時に重なるような場所や場面を日常生活で避けるように呼びかけました。このあたりの声明内容は、このコラム（かけはし）が発刊される頃には内容が若干変わっているかもしれませんが、感染対策、特に飛沫感染や接触感染が危惧されるウイルス性疾患には一般的な対策指針かと思います。実際、飛沫感染には1-2m以上離れることで一定の予防ができるとしても、マスクの有無には関係なく、手洗い・うがいを小まめにしなければ、人は無意識に顔や髪に手を持っていきますので感染リスクは高まります。

われわれ医療者にしてみると、人類の歴史が感染症との戦いであったことは常識的なこととして理解されています。過去には、検査で同定することも出来ない微生物により、原因不明のまま地域発生する疾病にて一定程度の人が亡くなることは珍しくありませんでした。また、そのような状況下にて住民間での差別が生じ、根拠のない対処法が取られていたこともよく知られています。当時に比べれば、検査方法も発達しワクチンや治療薬等の開発は進んでいるのでしょうが、全ての疾病を科学的に解決することは無理ではないかと思います。人間は未知の微生物が体内に侵入すると、熱を出すことによって戦いを行い、抗体を確保することで生き続けてきたはずです。現在の一番の問題は、そのような体調不良時にでも職場に出かけないといけない社会風潮や顔を合わすことが対話や交渉には必須であるという誤解（錯覚）のように思えます。

今回のコロナ騒動を通じて世界経済の低迷を危惧するよりも、新しい働き方や人間関係の在り方も見つめなおす機会にすべきではないかと考えます。1か所に集まり一定の労働時間で制約される社会から、能力次第で成果が評価される社会への転換が望まれている気もします。遠距離の移動は交通系会社の収益には大きく寄与するのでしょうが、ネット会議等を多用することで、間違いなく費用削減は図れるものと思います。

今こそ、新しい世界観への認識を皆で共有できる真の「春」の到来が望まれます。

医療福祉支援センター長　小林利彦